

小学6年2組 体育科学習指導案

指導者 小林 敏 朗

シンクロマットの学習において、テーマを設定しイメージをもちながら取り組むようにしたことに加え、表現運動にある対比の動きを提案し取り組むようにしたことは、マット運動における表現力を高めるのに有効であったか。

1 題 材 名 みんなでのびよう みんなでつくろう シンクロマット

2 題材のねらい

シンクロマットの作品づくりを通して、一つ一つの技ができるようになってきたり、友だちと話し合い、構成を工夫したりしながら、マット運動で表現することの楽しさがわかる。

3 授業の構想

(1) 5年生のマット運動では、主にとび前転や倒立前転の学習やつなぎの技を生かしてオリジナル連続技づくりに取り組んだ。その連続技づくりでは「友だちの演技を見て、やっぱり足を伸ばすときれいだなと思いました。」というような単一の技についてのふりかえりを書く子もいたが、連続技発表会ではこのようなふりかえりを書く子もいた。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・今日は連続技発表会をしました。私は、少し技と技との間に時間が空いてしまったから、これから気を付けたいなと思いました。(後略) (児童A)・今日は友だちと演技を見せ合って、それぞれのよいところを見付けました。それは、動きのリズムです。私は途中何をしたらよいか迷ったけど、〇〇さんや◇◇さんはリズムよくスムーズにできてすごいなと思いました。(後略) (児童B) |
|--|

児童Aは自分自身の演技を振り返り、児童Bは観察者の立場から思ったこととして、言葉は違いますがリズムや流れについて考えている。本題材「シンクロマット」では、友だちと演技を合わせながら、リズムよく次の技や展開に進むことが重要である。5年生のオリジナルの連続技づくりを通してのリズムや流れについての気付きを大切にしつつ、さらに本題材では「友だちと考え」「友だちと合わせながら」オリジナルのシンクロマットの作品づくりに取り組むことにより、マット運動の楽しさを広げてほしいと考えている。

(2) シンクロマットは、個人の技に加えて、チームによる表現型のマット運動である。マット運動というと、ある技が「できる」「できない」という単一の技の獲得にのみ偏る傾向がある。シンクロマットでは、全体のイメージをもつことで目的をもった技の学習、習得が可能になると考える。また、シンクロマットの楽しさは、友だちとの技のタイミングを合わせたり、意識的にズレをつくったり、進行方向を変えたりしながら、演技を構成するといった表現面にある。つまり、「友だちと合わせる楽しさ」「リズムに変化をつける楽しさ」「工夫しながら、作りかえていく表現の楽しさ」がある。本単元では、頭の中で最初につくりあげた全体のイメージ(理想像)に近い作品を求めて、自分たちのできる技、できそうな技で構成し、一連の作品をつくりあげていくことになる。その中で自分たちのイメージに迫り、自分たちだけのオリジナルの作品をつくっていく過程において、一人一人の問いがうまれてくると考える。

シンクロマットの学習では、導入時に子どもたちがどのような全体のイメージをもつかが大切である。つまり、作品全体や自分たちがどのように動くよいかというゴールのイメージをもつことが大切である。ゴールのイメージを明確にするために、導入時に、最終時の発表会の採点基準を示していく。5年生の連

続技づくりにおいてリズムや流れに意識が向いている子どもたちに右のような採点基準を示し、「スムーズな流れになっているか」「合わせるためにはどうすればよいか」「もっとわかりやすく伝えるためにはどんな工夫をすべきか」など、さらにレベルの高いチームの課題を意識させることにより、一人一人が自分の問いをもち、お互いに高めていく学び合いが可能になる。その中で、チームの仲間とともに追求しようとする姿が見られることと考える。

(3) 本題材を通して、子どもたちは「友だちと合わせる楽しさ」「リズム変化の楽しさ」「つくりかえていく表現の楽しさ」を感じ

じていくことになる。その中で、隊形や進行方向などの空間構成や友だちと揃えたりズレをつくったりする時間構成の学習をしていく。子どもたちは、オリジナルの作品づくりを目指し、問いをもち追求していく。具体的には、イメージをつくる段階の問い、一つ一つの技を高める段階での問い、チームで技を合わせる段階での問い、よりテーマが伝わるよう工夫する段階での問いが考えられる。子どもたちのもつ問いを確実にとらえ、学習場面でさらに掘り下げ、考えられるようはたらきかけていく。そのために、毎時間のふりかえりにおいて、次時につながるポイントについてふりかえりを行っていき、問いがつながるようにしていく。最終的には、チームでテーマに合う作品づくりを目指し、友だちと合わせながら、工夫して表現していく子どもたちの姿を期待する。

本題材は1チーム5名の6チームを構成し、2チームをペアにしてきょうだいチームをつくり、チームの学び合いや教え合いを大切にしていく。マットは方形マットを用いる。

第1次では、シンクロマットの作品のイメージづくりを大切にしたい。まずは、小学生や中高生などの映像を見てイメージをつかめるようにする。そして、自分たちが表現したいテーマに沿って、「はじめ」「なか」「おわり」のお話をつくり、作品の全体像をつかみ画用紙にまとめるよう提案する。その後、実際にマット上で動きながら変更していくことと考える。

第2次では、作品の中で行う技をお互いに高め合うことを目的として取り組む。具体的には、ペアシンクロに取り組みながら、チームの中でお互いの技を見合ったりアドバイスをし合ったりすることになる。友だちと技のタイミングを合わせることで、動きの中で身体制御する力も身に付くと考える。また、友だちと技を合わせる方法やポイントが分かってくることと考える。

第3次では、ペアシンクロの経験をいかしてチームとしての作品づくりに取り組む。その際に、指導者から対比の動きを提案したり、きょうだいチームでお互いに演技の組み合わせ方や場の構成などのアドバイスをしたりしながら工夫してつくっていくことになる。

そして、第4次の発表会では4点の採点基準をもとにお互いに工夫しているところ、テーマがよく伝わったところなどを認め合い、まとめとする。

本時は、チームのテーマがより伝わるような工夫について考える時間である。指導者から「大きく」「小さく」「速く」「ゆっくり」「高く」「低く」「動く」「静止」などの対比の動きを取り入れることを、表現運動の学習と結び付けながら提案する。子どもたちは、どういう工夫をするとテーマがより伝わるのか考えながら作品づくりをしていく。

- 全体の流れ
 - ・演技と演技の流れはスムーズか。
- 演技の工夫
 - ・テーマが伝わる工夫があったか。
 - ・演技の組み合わせ方、場の構成、スピードや高さに工夫があるか。
- 一つ一つの運動の美しさ
 - ・技がていねいに行われているか。
(補助つきOK)
- フレンドシップ
 - ・チームの仲間の息が合っているか。
 - ・補助などの助け合いをしているか。

4 展開計画（全8時間 本時7／8）

次	主な学習	時	具体的な学習・内容
1	自分たちのシンクロマットのイメージをつかもう。	1 2	・シンクロマットの映像を見て、大まかなイメージをつかむ。 ・テーマからイメージを広げ、作品の内容を考える。

2	ペアシンクロを通して友だちと技を合わせながら、お互いに技を高め合おう。	3 4	<ul style="list-style-type: none"> ペアシンクロを通して、作品に必要な技についてお互いに教え合ったり、補助し合ったりしながら学習する。 単一の技だけでなく、いくつかの連続技の中でそれぞれの技を高める。
3	お互いに意見を出し合い、チームの作品づくりに取り組もう。	5 6 ⑦	<ul style="list-style-type: none"> チームで技のタイミングや組み合わせなどを工夫したり、作品の内容を再度考えたりして、構成をつくりかえていく。 テーマがより伝わるように、対比の動きや演技の組み合わせ方、場の構成などについてアドバイスをし合う。
4	シンクロマット発表会をしよう。	8	<ul style="list-style-type: none"> 発表会を通して、採点基準をもとにお互いに工夫しているところを見付け、認め合う。

5 本時の学習

(1) ねらい

対比の動きを取り入れたり、演技の組み合わせ、場の構成などを考えたりして、さらにテーマが分かりやすく伝わるように工夫することができる。

(2) 展開

学習場面と子どもの取組	教師の支援と願い・評価
1. 「エアなわとび」「エアみんなでジャンプ」などをして体をほぐす。 2. チームで前転や後転など基本的な技を合わせる。 3. 前時のふりかえりを聞きながら、本時のめあてを把握する。	<ul style="list-style-type: none"> なわがあるものとしてチームの仲間と息を合わせて跳べるよう声かけをする。 リズムをとりながらチームの仲間と息を合わせて運動するよう声かけをする。 本時のめあてに迫れるような前時のふりかえりを紹介する。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> チームのテーマをわかりやすく伝えるために自分たちの表現を工夫しよう。 </div>	
4. テーマがよく伝わるように、自分たちで工夫して作品づくりをする。 ・ここは速く、そこはゆっくりとやってみよう。 ・激しい動きからピタッと止めてみよう。 5. ミニ発表会を通して、他のチームが工夫しているところを見付ける。 ・小さい動きを入れると大きな動きがより大きく見える。 6. ミニ発表会をもとに、発表会に向けて自分たちの動きを確認する。 7. できるようになったところや分かったところなどを中心にふりかえりをする。 ・速いところとゆっくりのところのメリハリをつけたら、伝えたいことがより伝わるようになった。	<ul style="list-style-type: none"> テーマがより伝わるように、演技の組み合わせや場の構成を工夫するよう投げかける。 「大⇄小」「速⇄遅」「高⇄低」「動⇄静」などの対比の動きについて、表現運動と結び付けて提案する。 チームの動きの様子を見ながら、前時までと比べて、よい動きは認め、必要に応じて助言をしていく 自分たちの工夫や変更点など画用紙に記録するよう声かけをする。 他のチームの作品を見て、よく伝わったところを出し合い、自分たちにもいかそうとする意欲をもつように声かけをする。 ミニ発表会で出た意見をいかし、自分たちの発表をさらに工夫するよう声をかける。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> 評価の観点（思考・判断） 対比の動きを参考にしたり、演技の順序や場の構成などを考えたりして、表現を工夫している。 【評価方法 発言・動き】 支援 対比の動きや順序の効果について、一緒に観察して変化に気付くようにする。 </div>	

(3) 本時で目指す子どもの姿

◎対比の動きを取り入れたり、演技の組み合わせ方や場の構成などを工夫したり、他のチームの演技を参考にしたりして、チームの仲間とともに表現を高めようとしている姿